

中秋

抹消されたかのごとく

透きとおり

胸の奥深く、さらに深くへと沈んだ記憶

そのあしあと

心地よい東風が吹き寄せて肩を冷やしてゆく

野には痛々しいまでの傷口を咲かせて花が揺れている

忍び寄る消滅、すなわち解放の時

望む者、強要される者

ただ一人であることの

胸を締め付ける淋しさ

そして

うれしさ

モザイク状に組み合わされた色つきガラス

それをかざしたときにのみ見渡すことのできるもの

茶色く色づき始めた風景と二重写しになり

ただ、じっと動かず、しかも息づくもの

円筒形をした廢墟に触れてみると

それは典雅な古語を口ずさみはじめる

空がかすんでいる

澄んだ大気が降ってくる

遠く、ふるえていた――

それが止まる

ただ無為を生きている

それでも明日は来る

淡々と

挨拶をする

(2009.10.8)